

經濟學史學會編

經濟學史學會 30年史

經濟學史學會

經濟學史學會編

經濟學史學會三〇年史

經濟學史學會



まえがき

経済学史学会は一九五〇年四月に早稲田大学で最初の大会を開いていらい、三〇年をへた。この一世代とも呼ばれる期間の経過を機会に、学会の歴史を記録しておくことは、有意義でもあり、必要でもあろう。かつて創立一〇周年に編集された学会史が「日本における経済学史研究十年の歩み」と題されたように、学会三〇年の歴史は戦後日本の経済学史、経済・社会思想史研究の歩みを如実に表現するだろうからである。

今回の『経済学史学会三〇年史』は、一〇年史以後に加入した会員がすでに多くを占めている事実や、学会史としての望ましい性格にもとらして、対象を一〇年史以降に限定せず、三〇年全体にわたることとした。一〇年史以後、『経済学史学会会員名簿』や『経済学史学会年報』の定期的刊行等の諸発展もあり、「十年の歩み」と『三〇年史』とは当然に編集方式に相違がある。刊行方式についても、日本学術会議の財政的援助をえて刊行された「十年の歩み」とはことなる条件のもとで、『年報』分載、出版社による市販、学会予算での独自刊行など三〇年史編集委員会の諸案が検討され、幹事会は最後者が適切であるとの結論に達した。

一九七八年に出口勇蔵、小林昇、水田洋、杉原四郎の歴代代表幹事と、そのまえ数期にわたり堀代表幹事のもとで事務局を担当した田中敏弘との五人からなる編集委員会が幹事会内に組織され、以後二年間の周到な作業の結果、ここにみられるような『三〇年史』を結実に導いた。本文は出口勇蔵、資料篇は田中敏弘が主として担当し、他の三委員がこれに協力した。予算の制約のもとで、可能な最大限の内容をもつことに成功した委員各位の労は多とされなければならぬ。

『三〇年史』とは別に、『年報』第一七号の紙幅の約一割が「経済学史学会の三〇年を語る」と題する座談会の記録にあてられた。参加者は全編集委員と堀経夫、および堀代表幹事のもとで田中敏弘とともに事務局を分担した久保芳和との七人

である。これも広義の『三〇年史』の一部をなすものとして、あわせて参照されることが望ましい。『十年の歩み』にも『三〇年史』にも補完的な役割をはたしうる諸点を、座談会特有のヴィヴィッドな文脈で——最初期の回顧の上で参加者に故久保田初代表幹事を欠かざるをえなかったことが惜しまれるが——伝えていくからである。

創立三〇年記念としては、このほか成城大学での第四回大会が三〇周年記念大会と呼ばれ、かつて恒例だった懇親会と経済学古典の展示がおこなわれる。これらは当番校の負担を考慮して割愛されるに至って久しい慣行ではあるが、成城大学の好意をえてとくに企画されることとなったものである。

また三〇周年記念出版も計画され、そのための委員会が三〇年史編集委員会と同時に幹事会内に組織された。まだ成案に達してはいないが、『日本の経済学』（仮題）を主題として、近い将来に実現の運びとなることが見込まれている。さらに、あたかも三〇周年を記念するかのように、二〇余年らしい懸案だった東北部会が本年六月に発足しえたことも附言されてよいであろう。

『十年の歩み』は創立当初一二三名だった会員が一〇周年には約五〇〇名に増加したとしているが、三〇周年の現在、会員数はさらに増大して約七〇〇名にのぼる。しかもその間に経済理論学会、社会思想史学会、日本一八世紀学会など、本学会とそれぞれの面で平行関係にある諸学会が組織されたことを考慮にいれるとき、この着実な増大は銘記されてよい。『三〇年史』の諸内容は、疑いもなく、本学会のそのような過去の発展の足どりを反映しているであろうし、また将来の発展への展望をも示唆しているであろう。

一九八〇年八月三一日

代表幹事 杉山忠平

目次

まえがき

第一部 経済学史学会の三〇年

第一章 序言

第二章 創設の時

第三章 整備の時

第四章 充実の時

第五章 新装の時

第二部 資料

I 会則

1 学会創立時の会則

2 現在の会則

II 役員および事務局

III 会員数の変動

IV 学会費と学会会計

二

三

一〇

一六

一九

二六

二六

二七

二九

三四

三六

	V	大会研究報告	三八
	VI	大会共通論題リスト	五五
	VII	公開講演会	五五
	VIII	外国人による特別講演	五六
	IX	経済学古典書展示会	五七
	X	経済学古典調査	五八
	XI	学会刊行物	五八
	XII	『年報』における学界展望(論文)リスト	六〇
	XIII	声明書・訴え・要望書	六二
	XIV	国際学会派遣	六四
	XV	部会活動	六五
	1	関東部会	六五
		関東部会の経験	六五
		関東部会研究報告	六六
	2	関西部会	七〇
		関西部会の回顧と展望	七〇
		関西部会研究報告	七二

3 西南部会……………八〇

西南部会のあゆみ……………八〇

西南部会研究報告……………八二

4 東北部会……………九〇

東北部会の発足……………九〇

資料篇あとがき……………九一

人名索引

第一部 経済学史学会の三〇年

第一章 序 言

経済学史学会は昭和二五年（一九五〇）年四月に創設された。したがって本年の春に創立三〇周年を迎えたのである。

本学会の歴史を語る大切な文献は、昭和三六（一九六一）年五月に学会が編集出版した『日本における経済学史研究十年の歩み——経済学史学会十年史』——編集に当たったのは、久保田明光・堀経夫・大道安次郎・山川義雄・松田寛・久保芳和の六名で、本文は主として大道の筆になる——である。断るまでもなくこれは創立一〇周年記念の出版物であって、日本学術会議から出版費の補助を受けて公刊することができたものである。いま三〇年の歴史を編もうとすると、ここに記載されているところに多くを負わなくてはならない。この文献に接しえない多くの人々のために、本書の内容を適宜に紹介しつつ、敘述することにした。

本学会三〇年の歴史はいくつかの時期に分けて考えることができる。ここでは次の画期を採りたいと思う。

- 第一期 昭和二五（一九五〇）年から三一（一九五六）年まで——創設の時
- 第二期 昭和三一年から三九年（一九六四）年まで——整備の時
- 第三期 昭和三九年から四七（一九七二）年まで——充実の時
- 第四期 昭和四七年から五五（一九八〇）年まで——新装の時

この画期は現在からみた場合にある程度の意味があるとしてとられたものである。今後はまたこれと違う画期の仕方もあるであろう。なおこの画期の区切りについて一言しておきたい。本学会は、秋の大会が終了するとその年度の活動は一応とじられる。ことに幹事改選の年度には、十一月中旬以後つぎの年の三月までは、会計整理のこともあって、そのあいだには、

事務の引継ぎが明確には行えない事情がある。だから画期の場合には区切りの幅が大きくならざるを得ぬというのが、従来の実情であった。しかし最近では、役員と事務局の交替は選挙の翌年四月に行われることになっており、画期は学年末を区切りとして出来るようになってきている。

では、上の四つの時に分けて、本学会の三〇年の歴史を語ることにしよう。

第二章 創設の時

(昭和二五年より三一年まで)

わが国の経済学界においては明治二九(一八九六)年四月に「社会政策学会」がはじめて設立されたことは、人の知るところである。しかしこんな古い一般的な話は省き、経済学史の研究と関係の多かった学会について述べると、昭和九(一九三四)年に「日本経済学会」という名の学会が設けられた。しかしながらその学会の活動は、日本が帝国主義戦争にのめり込むにつれて活発ではなくなり、遂には有名無実のものになってしまった。

一方、経済学史の研究には、我が国では伝統的な厚みがあった。高橋誠一郎の重商主義研究、福田徳三と河上肇との論争を通じてみられる学史研究の成果は、世人の注目をひいた。戦争の深まりにつれて、経済学の研究が、一部では、時局便乗の形で行われたのは止むをえなかったにしても、科学的良心を失わなかった研究が古典の研究に進路を取り、それを通して少しでも現実批判の姿勢を維持しようとしたので、いきおい相対的には学史・思想史の研究が盛んになっていったといえる。

また、第三に、戦時に経済学振興会が刊行した経済学の古典の翻訳シリーズ、「国富論」の邦訳書の文庫形式での刊行、

統計学古典選集の刊行などの事実も見おとすことはできない。

終戦を迎えたすぐ後で、日本人の社会的自由が一挙に認められたのに伴って、研究活動の自由が、日常生活の欠乏と離れられぬ状況の下で、われわれに訪れた。不自由な中から刊行された「世界古典文庫」は外国の文学や哲学の典籍とともに、経済学や社会思想の書物をよみ易い形で提供したので、それらを食べるように読んだ人たちも多かった。このことは、戦時に禁止されていたマルクス経済学への復帰の強い勢と重なって、思想的ないし学史的の研究への関心をますます募らせるものであった。

研究の自由の復活はやがて専門学会の形成へと導かざるを得ず、経済学の分野では、昭和二四（一九四九）年の秋には「理論経済学会」が生まれ、研究集会も発足した。そこで発表された研究報告には学史的の研究のものもあったのであって、久保田明光と堀経夫とは学史研究を専攻する学会の設立について相談するところがあった。

両教授は同学の士、すなわち高橋誠一郎、舞出長五郎、大塚金之助、坂本弥三郎にはたらきかけて賛成をえ、新しい学会を結成することに成功した。そしてこのことの裏には、我国の大学で戦前は経済学史が経済原論または経済史の担当者がかたわら講義するということが多かったのに、戦後はこの科目の講義が専攻の研究者によって行われるようになっていたという事情があったことを無視しえない。

久保田と堀は上にかかげた四氏とともに「発企人」となり、彼等の名をつらねた次の勧誘状を昭和二五（一九五〇）年一月に関係方面に送った。その主な部分を引いてみると――

〔前略〕 今般私共相諳り、経済学史の研究の爲めにお互いに協力して切磋琢磨する機会をもちたいと考えまして、茲に経済学史学会を創設いたしましたことになりました。御承知のように、この分野におけるわが国の研究にも欧米のそれに比べて、必ずしも劣らぬものを見ることが出来る様になって参りましたが、この機会に同学の方々と協力して、更に一層その水準を高めたいと念願いたしておる次第であります。〔下略〕

この勧誘状にたいして関心を寄せ、入会を希望する人たちは約一〇〇名であった。

昭和二五（一九五〇）年四月二一日、発企人たちは久保田の作った原案を中心に会則を作成した。この準備のあと、第一回の会員総会及び大会の案内状が入会希望者に送られ、四月二二、二三日の両日に、早稲田大学政治経済学部の校舎において、本学会の第一回の会員総会および大会が開催されたのである。この集会は参加する者四二人であったが、その次第は学会の研究集会の将来を予知させる意味をもっていたから、少しく詳しく述べることにしたい。

第一日（二二日）は午前一〇時から会員総会があった。掘が開会の辞をのべ、高橋を座長にすえ、久保田が発企人を代表して挨拶と経過報告を行ったあとで、会則案が審議、決定されたのである。

その会則の全文は第二部の資料Ⅰのはじめにあるが、その中の特色を摘記しておこう。まず学会の目的として「経済学史、経済思想史の研究」とあるが、この規定について少し考える。経済学史は名称の上では明瞭であるけれども、経済学には歴史あり理論あり政策ありという訳だから、その内容は必ずしも明確ではない。経済学の背骨といふべき理論に目を据えてその歴史を考えると経済学説史となるが、その理論の背後に人間や社会や歴史の観方をおいて考えようとする、経済学説史の範囲を越える。この点を考慮して会則には、経済思想史の科目名を経済学史の下に添えたのであろう。そしてまた実際に、本学会の設立に加わった人たちは固有の意味での経済学史家だけでなく、経済生活を一つの中心とはするものの社会生活の思想の歴史をたずねる人たちもいたのである。

役員には幹事と常任幹事と代表幹事とがある。この名称は学会の慣行にしたがうなら、理事・常任理事・会長というところであるが、それらを採らずにこの名を用いたのは、発企人の終戦後の社会感覚に由来するといえよう。

第三に、事業として掲げるもののうち、全国大会のほかに地方部会の開催のことがある。全国大会は年一回を定めとすが、臨時大会を開くことをさまたげない。そして実際には、創設ののち一三年間は、毎年二回の大会を催していたのであった。地方部会は近くに住む会員が相会して討論をする機会が容易に得られるようにするために考え出されたのであって、そ

の期待はやがて実を結び、三つの地方部会が研究活動を盛んにしており、更に今年になって第四の東北部会が設けられることになったこと、後に述べる通りである。そのほかの事業、たとえば公開講演会・内外の経済学諸学会との連絡・機関誌の発行などは、学会の発展とともにそれぞれ実現の途についている。

このようにみてくると、中味については若干の変更のあったこと後に見る通りだが、この会則は本学会の向かうところを明察して定められたものであったといえることができる。なお、学会の会費は年二〇〇円であった。

会則の審議のあとに役員が選挙されたが、結局、発企人に一任せられ、発企人が作った原案は、昼食後の総会で承認された。役員は顔ぶれは資料Ⅱのはじめにある通りになって、総会では高橋発企人を顧問に推薦することが承認された。結局、本学会はオリジナル・メンバーを計一二三名として発足したのであった。

戦後の日本の学会の連合体は、昭和二五（一九五〇）年一月二二日に東京で日本経済学会連合の名で成立していたが、その時に本学会が連合のオリジナル・メンバーとして加入することが承認されていた。本学会は正式に成立する前に連合体の中で市民権を得ていたものであり、これは久保田会員の努力の賜物であった。

さて、研究報告会には、資料Ⅴでわかるように、隅谷三喜男、玉野井芳郎、堀発企人、杉山清、越村信三郎、白杉庄一郎が研究報告を行った。そのあと、会員懇親会が催され、その出席者は二三名であった。

会務を司る事務局は、代表幹事と関係のふかい学校に置くということで、最初は早稲田大学におかれることになった。

あらましこのような経過をたどって創られた本学会は、はじめの五ヶ年間、すなわち昭和三〇（一九五五）年の秋の大会が終るあたりまでを第一期とし、これを創設の時と呼ぶことができよう。その間、大会および総会は、一年に春と秋との二度づつ催され、その場所は一方が関東地方であれば他方はそれより西の地という風に、会員の参加の便を考慮して選ばれた。即ち、早稲田大学・京都大学・東京大学・関西学院大学というようなのがその順序であった。（資料Ⅴを参照）